

ルボ

孤立死の人たち。

山川敦司
やまかわ・あつし(ルボライター)

遺骨を拒否する息子
「なんていまさら」

その部屋は古い二階建てアパートの二階一番奥にあった。玄関前には木製の牛乳瓶入れが置かれ、ひび割れた壁を這うように走るむき出しの配管が、築四〇年の歳月を感じさせ

ていた。

部屋の主は、七十八歳の独居女性、本宮まつ（仮名）さん。まつさんは三〇年前、トラック運転手のご主人とこの部屋に入居したが二人に子供はなく、自身も徒歩で一〇分ほどにある商店街の惣菜店で長年パート勤めをしていた。だが、一〇年ほど

アパートは家賃五万二〇〇〇円の1DK。ただ、自動引き落としだつた家賃は、これまで一度も滞納することはないといった。

ところが、昨年十二月。家賃の引き落としができず、不動産屋を営む大家の竹石洋蔵さん（仮名）が不審



孤立死した男性の部屋で殺虫剤をまく作業員 写真=読売新聞/アフロ

に思い部屋を訪ねると、異臭とともに玄関先に這い出した蛆虫を発見。警察官立ち会いのもと玄関を開けると、そこにはブラウスにセーター姿、マフラーを巻いたまま仰向けで絶命しているまつさんの姿があった。

まつさんは白髪だったが、抜け落ちた毛髪はカツラのように畳にへばりつき、その上を蛆虫やゴキブリ、ハエが飛び交い、畳にくつきり残っている人形はもがき苦しんで亡くなつたさまを、そのまま伝えていた。

検視の結果、遺体は死後二ヶ月と推定された。皮肉にも銀行に支給された生活保護費の残金があつたため自動引き落としが継続され、発見が遅れたようだ。

警察によつてすぐに鹿児島に住む長男に連絡が取られた。だが、警察から竹石さんが告げられたのは、耳を疑うような言葉だったという。

「実はまつさん、鹿児島にいた頃に

ご主人と息子さんを残して、男と駆け落ちしたらしいんですね。息子さんは、なんとしてはその後三〇年以上会っていないし、とつぐに戸籍も抜けている。なんでいまさら自分たちを捨てた女の遺骨を押しつけられなくちゃいけないんだと、えらい剣幕で引き取りを拒否したというんです」

息子は再三にわたる警察官の説得にも耳を貸さず、困った竹石さんは自治体に相談。生活保護受給者には規定の枠組みの中で火葬費用が支拂われるが、その大半が遺体を火葬するだけで通夜も告別式も行われない弔い、つまり直葬となる。

まつさんの遺体は小さな部屋に安置され、葬儀社社員の手で棺に花が手向けられた後、荼毘に付された。「私も三〇年以上部屋を貸していく知らない仲じやないし、家財道具の処分のこともある。で、息子さんには何度か連絡を入れてみたんです。

でも、「自分には関係ない、遺品はそちらで勝手に処分してほしい」の一点張りで。一応、委任状だけは送つてもらつたんですが、連絡が取れただけで、最後、後は電話に出なくなりました」（竹石さん）
本来、アパートやマンションで自殺などのトラブルが発生した場合、部屋は事故物件となり家主には告知義務が生じる。したがって家主は故人の親族に対し損害賠償を請求できるが、借主と家族が絶縁状態のような場合、支払いを拒否する親族が多く、賠償をめぐり裁判になることも少なくない。

竹石さんは所有するアパートが老朽化し取り壊しを検討中だつたこと、現在八世帯中二世帯しか入居しておらず、どちらも一階で幸いクレームがなかつたことなどを考慮して「ことを荒立てないことにした」という。

数日後、まつさんの家財道具一式は清掃業者により処分されることになった。すると、「清掃中、業者がたんすの引き出し一枚、あれは小学校の入学式なんか、和服姿の女性の隣で恥ずかしそうに袖から半分顔を出す男の子が写つていて……。家族に囲まれて幸せに過ごしていた時期もあつたろうに……あの写真はなんとも切なかつたですね」（竹石さん）
自治体に預けられていたまつさんの遺骨は四十九日を迎える頃、業者の手で身寄りのいない人たちが眠る共同墓地へと運ばれていつたという。

約一人きりの最期 一約一万五〇〇〇人が

高齢者の孤立死に歯止めがかから

ない。内閣府の「平成23年度版高齢社会白書」によれば六十五歳以上の人口は過去最高の二九五八万人に及び、うち五〇一万八〇〇〇世帯が「単独世帯」つまり一人暮らしの高齢者だという。昨年ニッセイ基礎研究所が発表した「平成22年度全国推計」によれば、六十五歳以上で孤立死を「死後四日以上経過して発見された人」と定めた場合、その数は一

万五六〇〇人を超える可能性があると、推定した。

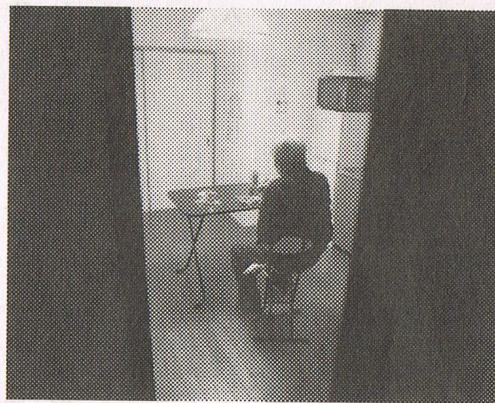
一般的に「孤立死」や「無縁死」から連想するのは、「天涯孤独」といふたものだ。だが、驚くことに近年は同じマンションや二世帯住宅に住みながら、死後数日たつてから遺体で発見されるケースも少なくないというのだ。

神奈川県内にある築二〇年の公団住宅の三階の部屋で、七十五歳の男性が死後五日たつて発見されたのは一昨年秋のこと。現場は横浜駅からJRで二〇分。のどかな田園風景が広がる閑静な住宅街だった。

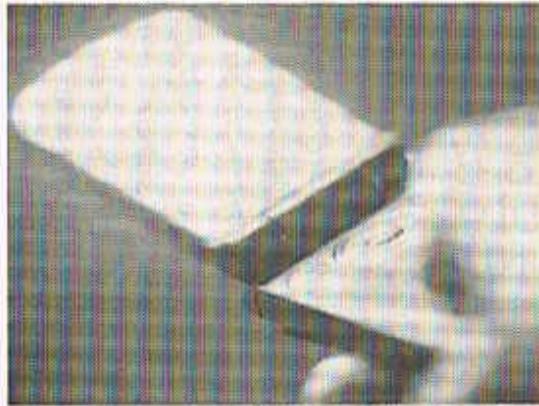
亡くなつた米田卓司さん（仮名）は東京下町で町工場を経営していたが、不況のあおりを受け倒産。年金だけでは老後を暮らせないとビル清掃員をしていたが人員整理で解雇され、そのままの直後に脳梗塞を患い入院。右手に麻痺が残り、三年前から息子

の住む公団で同居し始めることになつた。ただ、当初から親子は不仲だつたようで、ラジオ体操でよく顔を合わせていた男性は、こう語る。
「米田さんはもともと腕のいい板金工でね、それこそ朝から夜中まで真っ黒になつて働いて息子を大きくした。ところが、工場の仕事を嫌いでいた息子は高校を出ると家を飛び出して、以来親子は折り合いが悪いらしくて、米田さん、『本当はいつも世話にだけはなりたくない』って、よくこぼしていたから」
そんな米田さんの趣味がパチンコだった。ついフランコと出かけては、わずかな年金を使いはたしてしまうこともしばしば。

「で、また息子と揉めちゃう。ひどいときには罵り合う声が外まで聞こえていたからね」（前出の男性）
ほどなくすると息子が部屋を出て、同じ団地の敷地内にある部屋へ



©アフロ（写真と本文は関係ありません）



て……。たしかに父の死は突然だったし、発見が遅れたことは残念でした。でも、メールを読んで思つたんです。父の最期は決して孤独じやなかつたのかな、って。そう思つたら少し救われました

文恵さんは携帯電話に残された履歴をたどり、父親が生前親しくしていた友人や知人から故人の思い出話を聞くことができたという。

「孤独死ゼロ作戦」を推進する団地

「あいさつは幸せづくりの第一歩」そんな言葉のもと、「孤独死ゼロ作戦」を推進し、画期的な成果を上げてきた団地がある。それが、千葉県松戸市にある常盤平団地（五三六〇世帯）だ。

同団地の入居が始まったのは日本が高度成長真っ只中の一九六〇年。

当時は常盤平駅前から団地の中央を

た。そして、孤立死問題に取り組んでから十数年——中沢さんの強烈なリーダーシップのもと、常盤平団地は全国でモデルケースとして注目を浴びるようになつた。

孤立死は人間の尊厳を崩壊させるだけではなく、地域を崩壊させる危険をはらんでいるという。だからこそ、孤立死対策にはコミュニティ全体の努力と意識改革が求められる、と中沢さんは指摘する。

一本來、地域社会を構築するためには、支え合い、見守り合いが基本になります。ところが、現代は地域社会どころか家族内でもそれがないがこゝした状況を変えるためには、あいさつやおすそ分け、といった昔ながらの基本的生活を取り戻し、仲間をつくっていくことです」

常盤平団地では先述の言葉と並ん



中沢卓実 常盤平団地自治会会長

で「みんなで創る『向こう二軒隣』」そして「友は宝なり」というスローガンを掲げるが、その基本にあるのが人と人との係わり合いだ。

「人間は死を選べませんが生き方は

まだ、孤立死という言葉すらなかった頃だ。ところが、翌〇二年五月。またも一人暮らしの男性が死後四ヶ月たつて発見されることになる。

「男性は五十歳。別居していた奥さ

通るけやき通りが「新日本街路樹百景」に選ばれるなど、緑豊かな環境の中に立つマンモス団地は誕生的だった。ところが時は流れ、やがて訪れたのが高齢化の波。そんな中、九歳男性の孤立死だった。自治会会長の中沢卓実さんは言う。

「男性の遺体が見つかったのは、一九〇一年十月に起つたのが六十九歳男性の孤立死だった。自治会会長の中沢卓実さんは言う。二〇〇一年十月が経過していました。D.K.のダイニングキッチンの板の間で、死後三年が経過していました。発見が遅れたのは家賃が銀行引き落としたためで、男性は離婚して一人暮らし。両親とも縁を切つた状態で、酒びたりの毎日だったようです」

まだ、孤立死という言葉すらなかつた頃だ。ところが、翌〇二年五月。またも一人暮らしの男性が死後四ヶ月たつて発見されることになる。相次ぐ孤立死、さらに男性が五十歳という若さだったことが、さらなる衝撃を与えた。そこで、中沢会長が中心となり、常盤平団地の「孤独死ゼロ作戦」が始まった。まず自治会報で孤立死事件に関する詳細と対応策を取り上げ、緊急通報システム「孤独死田番」を設置。さらに希望する入居者に世帯構成や友人などの緊急連絡先、かかりつけの医師名などを記入してもらう。「あんしん登録カード」を作成し、それを自治会に預けるというシステムを導入。新聞販売店との間で「新聞がそのままだった場合に連絡してほしい」という協定を結ぶなど、八つの対策をたて

る「福」も「社」も幸せという意味。人と係わりを持ち、共に考え、共に喜べば、喜びも二倍になる。逆に一緒に悲しめば悲しみは半分になるじゃないですか。そのためには悪い生活習慣を絶ち、人間関係を築いていくしかない」（中沢さん）

家族の絆や親を思う気持ちが希薄になつたといわれる現代。この先、「車文化」「未婚化」が進み、「離婚」が増えれば、子供が親の面倒を最後までみられた時代は遠い昔のことになるだろう。

よく「死に様には、その人の生き様がそのまま現れる」という話を聞く。だとすれば、まずはあいさつを通して「あの人最近見ないな」と気づいてもらえるような関係を築くことが大切なではないだろうか。その小さな一步が、やがて「孤立死」防止のための大きな一步になること